☆☆☆　Library Eye　2021　☆☆☆

第２２号　２０２２年１月１１日（火）

発行元　明星中学校・高等学校　図書館

【 レファレンスサービスも大変だ❣ 】

新年、あけましておめでとうございます。

まずは初笑いということで、実際に福井県立図書館の司書が体験した、利用者の「覚え違いタイトル」をいくつかご紹介しましょう。（カッコ内が正式な書名です）

※「夏目漱石の『僕ちゃん』お借りできます？」（『坊ちゃん』）
※「『下町のロボット』ってありますか？」（『下町のロケット』）
※「『100万回死んだねこ』貸してください。」（『100万回生きたねこ』）
※「『おい桐島、お前、部活やめるのか?』ある?」（『桐島、部活やめるってよ』
※「カフカの『ヘンタイ』ってあります?」（『変身』）
※「『そのへんの石』ってあります？」（『路傍の石』）
※「『人生が片付くときめきの魔法』を探しています。」（『人生がときめく片づけの魔法』）
※「昔からあるハムスターみたいな本を探してるんだけど・・・」（『ハムレット』）
※「ウサギのできそこないが２匹でてくる絵本なんだけど・・・」（『ぐりとぐら』）

なかでも感嘆するのが次の一品です。

※「『これこれちこうよれ』ありますか?」（『日々是好日』）

これでわかってしまうのですから、司書さんってすごいですね。また、この手のものを本にしようと考えたなと、その発想力にも驚かされます。

でも、この「覚え違いタイトル」で笑うには、タイトルを知っていなければならない、ということにお気づきになったでしょうか?

【 つねに《進化》を❣ 】

札幌山の手高校の女子バスケットボール部と言えば、５度の全国優勝に輝く名門です。そのコーチを務めている上島正光氏が、フジテレビの『ミライモンスター』の取材を受けて、このような発言をしていました。

「うちは朝練習はしない。今は共働きの家庭が多いので、朝早く登校するとなると、どうしても朝食がいいかげんになってしまう。選手にとって食事と睡眠は、とても大切。選手を勝つための道具にしてはいけない。だからうちでは『全国優勝』的なスローガンも禁止している」

大リーグでMVPを受賞した大谷翔平選手も、栄養やトレーニングに対する意識がとても高いそうです。担当の管理栄養士の方によれば、「このトレーニングをやると決めたら、これくらい動くから、この量を食べなきゃと考えて食べる。これを食べたいからではなく、すべて野球に結びついている」と感心しています。

一方で他のアスリートとの違いは「常に進化を求める姿勢」だと言います。大谷選手は「少しでも進化できる方法を日々、探し続けている」のです。この旺盛な探究心こそが、昨年の大活躍に結びついたことは間違いないでしょう。

【 寅年生まれは 頼れるリーダー…？】

新しい年が始まりました！ 今年の干支は寅(とら)です。

寅年は、十二支の３番目にあたり、動物の“とら”に対応します。元来、中国の干支は植物の循環を意味しており、春が来て草木が生ずる状態を表しています。「寅」は「動く」の意味があり、３番目の段階として発芽のイメージに「寅」をあて、「とら」と読むようになりました。

凶暴で怖そうなイメージのある虎ですが、日本は本来の生息地ではありません。古来虎が身近な動物だった中国や韓国では、虎は神通力のもつ気迫溢れる霊物で、またユーモラスなイメージで親しみのある存在だそうです。そこから、寅年生まれの人は前向きでチャレンジ精神や正義感が強く、どんなことにも強い信念を持って挑んでいく人が多いようです。加えて、社交好きで周囲を楽しませることを得意とし、多くの人に好意を持たれやすいそうです。行動力の高さとサービス精神旺盛な性格から、周りの人をまとめるリーダーに向いているかもしれません。

新しい年が皆様にとって明るく楽しい年になりますように！ そして１冊でも多く、新しい本との出会いがありますよう、心よりお祈り申し上げます。本年もどうぞ、よろしくお願いいたします。

【 読書活動推進フォーラムに行ってきました！ 】

12月26日に司書３名で、「独立行政法人国立青少年教育振興機構」主催の**読書活動推進フォーラム『読書で広がる世界』**を聴講して来ました。

第一部は、**「子どもの成長と読書～多様な絵本活動とともに～」**をテーマに、柳田邦男さん(ノンフィクション作家)の講演でした。まずは子どもと絵本をつなぐ取り組みが紹介され、コロナ禍に於いてもできることを大人がしっかりと考え、子どもと絵本との出会いの場をつくり、絵本を通して心の豊かさを体験してもらう場を提供する重要性をお話しされました。次に大人と絵本をつなぐ取り組みとして、老人ホームでの絵本コーナーの設置や、生涯学習で絵本を読んで、グループに分かれてディスカッションを行った事例が紹介され、歳を重ねてからでも絵本を読むことで、孫達と共通の話題も増え、子どもが絵本を身近に感じるきっかけづくりにもなる、そして、人生を長く生きた大人だからこそ、絵本の深みに気付き、今後の生き方にも影響を与えるとのことです。「家で一緒に絵本を読んだり、読み聞かせをしたりする文化が根づくと、絵本を通じてこの国が変わるかもしれない。」とおっしゃっていました。子どもだけでなく大人にとっても**「絵本のもつチカラ」**は大きいのだと感じました。

第二部は、**「読書で広がる世界」**をテーマに、ヤマザキマリさん(漫画家・文筆家)、秋田喜代美さん(学習院大学文学部教授)、サンキュータツオさん(学者芸人)が登壇し、杉上佐智枝さんの司会でシンポジウムが行われました。ヤマザキさんは幼少期から、お母様が常に本や新聞を読んでいる姿を見ながら育ったため、本を身近に感じられていました。秋田さんも、本を買い与えてくれる家庭に育ち、本を読んで小説の中に入り込み、登場人物になりきることで癒されていたそうです。サンキューさんは、幼少期はふたりのお姉さんの影響で、少女漫画で活字に触れていたそうです。３名とも、子どもの頃から本が身近に自然にある環境で育ったそうです。子どもに読書を楽しませるにはどうすればよいかとの質問に、ヤマザキさんは、親が楽しそうに本を読む姿を見せれば、子どもは面白いものが好きなので、自然と興味を持つとおっしゃっていました。秋田さんも「Share books with your children」読むって楽しいということを、子ども達に伝え、無理強いするのではなく環境を整えることが重要とおっしゃっていました。家で大人が読書を楽しむ姿を見せることが、一番の読書への誘いになるのだと感じました。コロナ禍で、これまでより長く家で過ごす時間を、新たな本や絵本、昔読んだ本の再読にあて、皆様も読書を通して世界を広げてみてはいかがでしょうか。